

# 「対象」の問題

—— フレーゲの見解をめぐって ——

富田 恭彦

周知のようにフレーゲは固有名の意味 (Sinn) と指示対象 (Bedeutung) とを区別した。この区別はその後言語、論理、認識等を論ずる際の一つの枠組として、かなり広範に受け入れられるに至っている。だが、それは言語の関わる事態の本質構造の一つの相を適切に明るみに齎しているであろうか。小論はこの問いを念頭において、フレーゲが「対象 (Gegenstand)」をどのように解しているかを明らかにし、その問題点を探ろうとするものである。

本論に入る前に予めフレーゲの若干の用語を簡単に説明しておく。固有名 (Eigenname) とはただ一つの対象を表わす表現のことであり、従って所謂固有名だけをさす用語ではない<sup>(1)</sup>。関数 (Function) とは例えば「日本の首都」という表現における「の首都」という部分、あるいは「カエサルはガリアを征服した」という表現の「はガリアを征服した」という部分が指示するもののことである。この用語の用法は後の叙述の内てより明確になるであろう。概念 (Begriff) とは真理値 (Wahrheitswerth) を値としてとる関数のうち、一変項のもの<sup>(2)</sup>のことである<sup>(2)</sup>。これに対し、多変項のものは関係 (Beziehung) と言われる<sup>(3)</sup>。真理値とは平叙文 (以下「文」と略記) の指示対象であり、真 (なるもの) あるいは偽 (なるもの) のいずれかのことである<sup>(4)</sup>。

なおこの論文で用いられる「指示対象」「指示されるもの」「(…の〔が〕) 指示するもの」という語はいずれも “Bedeutung” の訳語である。固有名 (文も含む) が指示するもの場合には「指示対象」という語を用い得るが、関数の表現 (以下「関数表現」と略記) の指示するものに対してはこの訳語は不適切である。それ故それに加えて「指示されるもの」とか「指示するもの」といった訳語をコンテキストに応じて使い分けることにする。また彼の論文は (例えば S B の如き) 略記号で示す。これについては文献表を参照されたい。

## 1

意味と指示されるものを主題とした論文 S B では (真理値を除く) 指示対象に関する積極的な説明は見出せない。そこで、対象に対してフレーゲが与えた規定を他の論文に求めれば、その主たるものは関数 (ないし概念) との対比において与えられており、次のように纏めることができる。

- [1] 関数は不完全 (unvollständig) で補完を要し (ergänzungsbedürftig) 不飽和 (ungesättigt) であるのに対し、対象は完全で補完を要せず飽和している。そして対象は関数を補完して完全なものにする<sup>(5)</sup>。

〔2〕 不定冠詞から始まる名詞（句）は概念を指示するのに対し、単数定冠詞から始まる名詞（句）は対象を指示する<sup>(6)</sup>。

〔3〕 概念はその本性からして述語的であり、述語の指示するものであるのに対し、対象は述語全体の指示するものではあり得ず、主語の指示対象となり得るものである<sup>(7)</sup>。

これらの規定を手掛りとして、考察を進めることとする。

考察の手順を先取りして示せば、先ず我々は〔1〕を検討する。そのために、関数に対してもその表現の意味と指示するものを区別する見地をフレーゲが採ったか否かという問題を次章において扱う。そして第3章でこの問題に対して従来採られたいずれの見解においても、〔1〕に示された対象（及び関数）規定を十全に解することが困難であることを示す。第4章ではこの規定がむしろ表現の意味の性格に基づくのではないかという一つの推測が示される。この推測に従って我々は意味の性格の違いの根拠を〔2〕、〔3〕を顧慮しつつ示そうと思う（第5章）。最後の章では、フレーゲが意味と対象を区別する際対象を素朴に措定していること、そしてこのことによってその区別を問題的なものとし、後に課題を残していることが示されるであろう。

## 2

既に述べたように、フレーゲは固有名について表現の意味と表現の指示するものとを区別したが、関数表現についてはどうか。この問題は既にこれまで注目されてきたところである。我々はここで再びこの問題を取り上げる。というのは対象の相関者である関数が意味と指示されるものの区別という視点からどこに位置するのかを定めなければ、両者の対比において与えられた規定を適切に吟味することはできないからである。そこで意味と指示されるものの区別は関数表現にも当てはまるのか、当てはまるとすれば、関数は意味と指示されるものの内いずれのものなのか、先ずこれらの問題を検討しよう。

フレーゲは関数表現の意味とそれが指示するものについて多くの箇所ですべて語っている。しかし、それらが相互に異なるものであることを明示した箇所は公刊された論文中には殆ど見出せない<sup>(8)</sup>。それ故、この点を明らかにするために関数表現によって指示されるものについて述べた箇所を幾つか引用してみよう。

「… 私はこの「不飽和」な部分が指示するものに関数という名を与える。」（FC-31）

「それ〔概念〕は… 文法的述語が指示するものである。」（BG-193脚註）

「記号間のこの区別〔すなわち飽和・不飽和の区別〕には勿論指示するものの領域におけるアナロジカルな区別が対応する。すなわち固有名には対象が対応し、述語部分には概念が対応する。」（FG-12）

「不飽和な部分」、「文法的述語」、「述語部分」とはいずれも関数表現のことであり、また概念は関数の一種である。従ってこうした箇所からすれば関数は関数表現が指示するものである。他方、FCにもBGにもSBへの言及があり、この点を念頭におけば、上のような言い回しから、関数表現にも意味と指示されるものの区別が適用され、関数はそのうちの指示されるものの方で

あると理解するのが自然であるように思われる。(こうした見方はフレーゲ解釈においてはよく採られるものである<sup>(9)</sup>。)

次に関数表現の意味について述べた箇所を引用しておく。

「… 思想〔すなわち文の意味〕の諸部分はすべてがすべて完全ではありえない。少なくとも一つは「不飽和」ないし述語的である。そうでなければそれら〔思想の諸部分〕は結合することができない。例えば「2という数」という句の意味と「素数という概念」という表現の意味とは、〔両者を〕繋ぎ合わせるものなしには結合しない。我々は「2という数は素数という概念の下にはいる」という文においてそうした繋ぎ合わせるものを使用する。それは「… は… の下にはいる」という、主語と目的語によって… 完全なものにされなければならない言葉の内に含まれる。そしてその言葉の意味がこのように「不飽和」であるという理由のみにより、それは繋ぎ合わせるものとなり得る。それが… 補完されたときのみ、我々は完全な意味すなわち思想を得るのである。」(BG-205)

ここで関係について言われていることは一般化することができる。すなわち関数の意味は不飽和であり、それ故に繋ぎ合わせるものとなり得るのである、ということである。ある論者はこうした叙述からフレーゲは関数を指示されるものとしても意味としても扱っているという見解を採る<sup>(10)</sup>。だがこうした箇所に基づいて直ちにこの結論を出すことはできないと思われる。というのはフレーゲはあくまで関数表現の意味について語っているからである。そこで我々は暫定的に意味と指示されるものの区別が関数表現にも適用されるという(どちらかと言えば)自然な見方を探って、さらに考察を続けることにする。

### 3

さて、先程〔1〕に示しておいた対象及び関数の規定について、表現が指示するもののレベルで考えてみよう。真理値を値としてとらない関数の内から「の首都」によって指示される関数を例にとると、この関数はフレーゲの見解に従えば、例えば日本という対象によって補完されることによって完全なものとなり、その結果東京という対象になると言える。だが、何か日本によって満たされることにより東京となるということは、非常に理解し難いことである。日本や東京という対象存在と同じレベルで存在する不完全な何かがあって、それが日本によって補完される、そうした「何か」をいかに解すべきであろうか。「関数」という言葉は現代では所謂「写像(mapping)」と同義に用いられるが、フレーゲの用法はこの用法とは一致しないと思われる。というのは、写像の場合には二つの対象集合が定められ、その集合の要素(すなわち対象)間の対応がつけられるわけで、この場合には関数はある関係なのである。そしてこの場合フレーゲ流の言い回しをすれば、ある不完全なものが二つの完全なものによって補完されると言えるであろう。フレーゲが言っているのはそういうことではない。一つの完全な対象が不完全な関数と結合して、一つの完全な全体になると言うのである。従って、表現や意味とは異なるまさしく「指示されるものの領域」の中で、対象と関数が理解されなければならないのである。上に示した理解

の困難については概念や関係の場合にも同様である。例えばカエサルという対象によって「はガリアを征服した」という表現によって指示される関数が補完されて真（なるもの）という対象になる、ということはいかに指示されるもののレベルで解すべきであろうか。

文の指示対象とされる真・偽を事実（ないし事態）そのものと解して良いならば、彼の主張は次のように解することもできよう。すなわち、対象のもつ性質や関係が関数なのであり、このような関数が対象の補完により、事態を形成するのであると。こうした把握は概念や関係の場合には適切であるように見える。だが「の首都」とか「の万年筆」によって指示されるような関数の場合にはうまくいかない。（私はこのような解し方がそもそも対象や事態の素朴な指定に基づいていると考える。このことは後に言及するが、詳細については後日を期したい。）

そこで、フレーゲは関数表現の意味と指示するものとを同一視しているという先に暫定的に斥けた見解に譲歩してみれば、どうであろうか。この場合にもまた困難がある。先に引用した箇所（BG-205）に見られるように、関数表現の意味が不完全（不飽和）であることはフレーゲの認めるところである。だが、この不完全な意味（すなわちこの場合には関数）は決して対象そのものによって補完されるのではない。意味は意味によって補完されて完全な意味となるのである。すなわち、こうした不完全な意味を関数と見做すことは必ずしも不可能ではないが、かかる関数は決して対象そのものによって補完されることで完全な意味になるのではない。フレーゲの固有名に関する意味と指示されるものとの区別に固執すれば、こうした見解は奇妙に思われる。

#### 4

では我々は、対象と関数に関する先の〔1〕に示した規定をどう解したら良いのであろうか。出発点に戻って、フレーゲが完全・不完全等々の規定を導入する仕方を見てみよう。FCに次のような箇所がある。

「… 数学的表現がそれへと分割されるところの二つの部分すなわち変数〔変項〕の記号と関数の表現は似ていない。というのは変数は数でありそれ自身で完全な全体であるのに、関数はそうでないからである。」（FC-24～25）

ここでフレーゲは対象（数）の表現（以下「対象表現」と略記）と関数表現の相違点について言及し、そしてそれを対象と関数の性格の違いに基づけている。表現の相違はさらに次のように具体的に説かれる。

「… 関数を表わす表現は変数（変項）の記号によって満たされるための一つないしそれ以上の場所を常に示さなければならない…。」（FC-25）

つまり、対象表現は空所をもたないのに対し、関数表現は満たされるべき空所をもつ、というのである。そして、先の引用箇所で言われたことを考え合わせれば、こうした表現における相違はフレーゲの場合表現によって指示されるものの相違（すなわち〔1〕に示しておいた相違）によって説明されるのである。だが、一方では、彼が明記していないにも拘らず表現の相違がむしろ意味の相違に基づけられていると思わせる箇所が少なくない。一つは先に引用した箇所（BG-205）

である。もう一箇所引用しておく。

「… 言明は一般に二つの部分すなわちそれ自身で完全な部分と補完を要するないしは「不飽和な」部分へと分割されると想像することができる。こうして例えば我々は「カエサルはガリアを征服した」という文を「カエサル」と「はガリアを征服した」に分割する。第二の部分は「不飽和」であり、空所を含む。そしてこの空所が固有名もしくはそれに替わる表現によって満たされる場合に限り、完全な意味が現われる。」(FC-31)

不飽和な表現が固有名によって満たされる結果、「完全な意味」が得られる — このような言い回しはそれだけでは必ずしもフレーゲが指示されるものに完全・不完全等の規定の最後の根拠を見出しているという解釈を斥けるものではない。だが我々は先に指示されるもののレベルでの完全・不完全等の諸規定が理解し難いものであることを見た。そして、上の引用箇所が示すように、しばしばフレーゲは表現の補完の結果を表わすのに意味のレベルでの完全・不完全等の規定を持ち出すのである。こうしたこととともに、フレーゲが関数表現についてその意味と指示するものとの区別を殆ど明示していないということを考え合わせてみるなら、彼が対象と関数に対して与えた規定は、彼の明示的主張にも拘らず、意味のレベルに最後の根拠をもっているのではないかと考えられる。つまり、意味レベルでの諸規定が、指示されるもののレベルにアナログカルに移されたのではないかと考えられるのである。

この件に関し、もう一つ付言しておきたい。SBにおいて意味と指示されるものの区別に関してフレーゲは次の点を指摘している。

- (1) 適切に形成された固有名は常に意味をもつといえるが、意味をもつことを理由に何らかの指示対象がそれに対応するとは言えない。つまり、指示対象をもたぬ固有名もある。(SB-28)
  - (2) 思想はそのうちのある部分の指示対象がない場合には真理値をもたないが、その部分の指示対象の存否は思想そのものの内容に影響しない。(SB-32~33)
- (1)からすれば次のように考えられよう。仮に対象表現とその意味に与えられた完全、飽和等の規定が、指示対象の本性に由来するとすれば、指示対象をもたぬ固有名の場合にはその意味と表現が完全等々であるということはいえないであろう。だが、その場合でも意味及び表現が完全であるということはいい得る。しかも、表現が完全か不完全かは単なる表現そのものに注目するだけでは判定できない。そこで、意味の完全性が表現の完全性を根拠づけていると考えることができる。そして、フレーゲは彼の明示的見解にも拘らず、こうした方向で完全性を理解しているように思われる。SBで彼は次のように述べている。

「観念論者や懐疑論者の側からは恐らくもうとっくに次のような異論が申し立てられているであろう。「君はここで何のコメントもなく月を対象として語っている。しかし、「月」という名が一般に指示対象をもつことを君は何によって知るのか。一般に何かが指示対象をもつことを君は何によって知るのか。」〔この問いに対し〕「月」と言うとき我々は自分達のもつ月の表象について語ろうとしているのではなく、意味で満足しているのでもなくて、指

示対象を前提しているのではあると私は答える。「月は地球よりも小さい」という文で月の表象が問題にされていると考えるのは全く意味の誤解というものである。話者がこの〔月の表象の〕ことを言おうとしているなら、彼は「私のもっている月の表象」という言い回しを用いるであろう。さて、我々は慥かに先の前提において間違いを犯しているかも知れない。そしてそうした間違いは実際起きている。しかし、我々が常に誤った前提をしているか否かという問いに、ここで答える必要はない。記号の指示対象について語ることを正当化するためには、語ったり考えたりする際の我々の意図を指摘することで十分である。そのようなもの〔指示対象〕が存在するとすればという条件付きではあるが。」(SB-31~32)

指示対象が存在するか否かはともかく、我々が表象や意味ではなく対象について語ろうとしていること、このことによって指示対象について語ることが正当化されるというのである。こうした見解の提示は、フレーゲが対象について語りつつもその場合の対象が実は対象そのものといったものでなく、次章で述べるように意味を介して特定される対象となっていること、言い換えれば意味に基づく限りにおいて対象に言及しているということを示すものと思われる。(こうした捉え方はむしろ事態に即している。フレーゲにおいて問題なのは、論文の端々に見られるこのような捉え方にも拘らず、対象が自体的に存在するというを「何のコメントもなく」前提してしまふことにある。)

フレーゲがその明示的主張にも拘らず意味の完全性を根拠とする立場にあるのではないかという推測は、(2)を引き合いに出すことによっても行なうことができる。ある文の意味はその諸部分に対応する指示されるものの存否に拘らず同一にとどまるとフレーゲは言う。文の表現と意味は、その表現(ないしその部分をなす固有名)の指示対象の存在とは直接関わりなくある意味で完全性、飽和性をもつと言えよう。だがこの性格が文(ないしその部分)の指示対象に基づくとするならば、意味と指示されるもののいずれをも具えた文に関してでなければ、こうしたことは言えないであろう。このような点を考えれば、フレーゲの言い回しにも拘らず、意味のレベルでの性格の相違として捉えられることが表現および指示されるものの性格把握に反映しているのではないかと思われる。

## 5

それでは意味のレベルでの完全・不完全、飽和・不飽和ということはいかに解されるべきであろうか。フレーゲは既に見たように文の意味(すなわち思想)を完全なものとする。さて、完全性を文の意味にのみ認めるとすれば、その部分はいずれも不完全であるということになるが、これはフレーゲの見解ではない。既に見たように、文のある構成部分すなわち固有名のもつ意味をも彼は完全なものとしている。これは何を意味するのであろうか。

そもそも表現が意味を表現するということは我々はその表現を理解することにほかならない。我々は対象表現も関数表現も理解することができる。そうしたことからすれば、いずれも意味を表現していると言える。しかるに、対象表現はそれだけで、フレーゲの言うように、何かある意

味で完全な理解といえるようなものが可能であるのに、関数表現の理解にはいわば「不安定さ」といったようなものが伴われているという違いがある。この違いは何に由来するのか。固有名はそれだけで、それが理解されるならば、ある対象を特定し示す働きをもつ。例えば「日本の首都」という表現は、それを理解する者に何のことであるかを示す。文中に置かれる場合も同様である。一般に固有名は我々の語りの形すなわち何かについてあることを語るという構造のうちで、それについて語られるところの何かを示す働きをなす。この、それについて語られる「何か」は、一般に主語によって示される。主語となる表現は、それが理解されることによって、語られるものを特定し際立たせるのである。関数表現には、それだけでは、特定のものを際立たせる働きがない。「はガリアを征服した」とか「の首都」とか「ある人間」とかいった表現は、理解されても特定の何かを際立たせはしないのである。意味の完全性の基準は、フレーゲによって明示されてはいないが、こうした点に存するように思われる。

こうした見方は慥かに単なる推測の域を出ない。だが1で挙げた諸規定のうち、文法的側面から与えられた〔2〕、〔3〕を思い返せば、こうした見方がフレーゲの明示的主張と全く無縁であるとは思われない。一般にある特定の一つの対象を指示するために単数定冠詞を用いるということ、特定の対象を指示する表現は文の主語になり得るということ、こうしたことはまさしく上に示した見解の裏書きとなるように思われる。

関数表現の意味はそれだけでは語られることを知らしめるにすぎず、「何について」の「何」の理解を与えないと私は言った。慥かにこうした言い回しはある意味で同語反復的であり、それだけで関数表現の意味が不完全だということを示すことにはならない。だが、それにも拘らず、対象表現の意味を完全とし、関数表現の意味を不完全とするフレーゲの見解が何か根拠をもつとすれば、それは主語、実体、基体、個体等々の述語、属性、性質、関係等々に対する優位という、我々の語りの構造に根差した一つの伝統的な思惟の枠組にほかならないと考えられる。そうであるとすれば、関数表現の意味は、それだけでは対象を特定しないということにおいて不完全なのである。

ついでながら、この視点から見れば馬という概念は概念ではなく対象であるという彼の見解<sup>(11)</sup>は容易に理解されよう。文法上からすれば「馬という概念」という表現はドイツ語では単数定冠詞から始まる。それ故〔2〕に示したフレーゲの基準からすればその表現の指示するものは概念ではなく対象である。それはなぜか。フレーゲによれば概念とは不完全で補完を要する不飽和なものであって対象ではない。しかし、それについて人が何かを語ろうとする際には人はそれをそれとしてすなわちかくかくの $\dot{\text{m}}\dot{\text{o}}\dot{\text{n}}$ として把えているのであって、もはや例えば「は馬である」といった表現が理解せしめる述語的本性のままに把えているのではないのである。「表現の意味は対象である<sup>(12)</sup>」という言い回しの場合にも、同様のことが言える。慥かにフレーゲの見解では一般に意味が対象であるはずはない。一般に意味は表現が用いられる際に理解されはするがその表現によって指示されはしない。だが我々が意味について語るとき、まさしくそれについて語るが故にそれはあたかも一つの対象であるかのように扱われるのである。こうした扱いは言語の性

格によるものである。もし我々が何かについて語ることをなしに語ることが可能であればこうした対象でないものの対象化は起こらないかも知れない。

## 6

以上に論じたことを纏めると次のようになる。

- (1) 対象は、関数が不完全であるのに対し、完全である。
- (2) 対象の完全性、関数の不完全性は意味の性格の違いによる。
- (3) 表現の理解はそれが指示する対象の存否には依存しない。

(1)、(3)はフレーゲ自身が明確に主張するところである。これに対し(2)は我々の推測によるものでフレーゲ自身は明示していない。

さて、以上のことから、次のことが導出できる。仮に(2)に示される推測が正しいとすれば、フレーゲの言う対象は、曖昧性を残す概念である。何となれば、我々は表現の有意味性によって表現を理解することにより、対象を特定することができる。こうして意味を介して特定化された対象は、理解された対象である。ところが(3)に示すように、表現の理解は対象の存否に依存しない。従って存在、非存在が言われ得る対象と、理解された対象とは直ちに同一のものとは言えず、単に意味を介することによって扱えられる対象は、指示対象として指定されるものとは一応区別されるべきものであると言わなければならない。(このことはついでながら、もし、関数表現の意味と指示するものとを区別するのがフレーゲの真意であるならば、我々が関数表現の有意味性によって理解するところのものと同関数そのものとの区別を同様に要求する。)こうした二種の対象(ないし関数)の区別が問題として残る原因はフレーゲが言語によって指示されるものを素朴に表現や意味とは異なるものとして指定していることによると考えられる。表現が意味をもつということは、表現という対象に意味という対象が加わっているということではなく、まさしく表現を我々が理解し、何についての何、いかにあるかのいかにを知ることなのである。従って、すでに意味を介して我々は対象に向かって踏み出している。その点を十分に把握するならば、我々によって理解されたもののほかに何かそれ自体として存在したりしなかったりするものを別個に指定することはもっと慎重になされなければなるまい。完全な言語の構築によって数学の根拠づけを遂行しようとするフレーゲの意図からして、この点についての考察を彼に要求するのはある意味で不当であるかも知れない。そうであるならば、このことを慎重に遂行すること、これは我々に課せられた一つの課題である。

〔註〕

- (1) (BG-197脚註)、(SB-27)、(GA-7)参照。(括弧内の数字は頁数を示す。)
- (2) (FC-30, 39)、(GA-8)参照。
- (3) (FC-39)、(BG-205)、(GA-8)参照。



- (4) (FC-28~29)、(SB-34)、(GA-7) 参照。
- (5) (FC-24~25, 27)、(GA-6~7) 参照。
- (6) (BG-195他) 参照。
- (7) (BG-193~195他) 参照。
- (8) マーシャルが指摘するように (SRR-343)、(GA-50~51) における論述はその明示箇所と解し得る。
- (9) 例えばダメット (FFRを参照)。
- (10) マーシャル (SRR-346)。
- (11) (BG-196以下) 参照。
- (12) ジャクソンはフレーゲが未公開論文でこう論じていると報告している (FO-394)。

(引用文献)

- FC : Frege, G., "Function and Concept" (transl. by P. T. Geach), *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege*, edited by P. Geach & M. Black, Oxford (Basil Blackwell, 1960), 21-41.
- BG : Frege, G., "Über Begriff und Gegenstand", *Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie*, XVI (1892), 192-205.
- SB : Frege, G., "Über Sinn und Bedeutung", *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, C (1892), 25-50.
- GA : Frege, G., *Grundgesetze der Arithmetik*, I, Hildesheim (Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1962).
- FG : Frege, G., "On the Foundations of Geometry" (transl. by M. E. Szabo), *Philosophical Review*, LXIX (1960), 3-17.
- FFR : Dummett, M., "Frege on Functions: A Reply", *Philosophical Review*, LXIV (1955), 96-107.
- FO : Jackson, H., "Frege's Ontology", *Philosophical Review*, LXIX (1960), 394-395.
- SRR : Marshall, W., "Sense and Reference: A Reply", *Philosophical Review*, LXV (1956), 342-361.

(哲学博士課程 三回生)